

# 生活困窮世帯の子どもの学習支援の効果を生み出すプロセスに関する一考察

## ——「学習支援によるケア」の作用に着目して——

○東京都立大学 松村 智史 (009043)

キーワード: 子どもの貧困、学習支援、ケア

### 1. 研究目的

2019年4月から、生活困窮者自立支援制度に基づく学習支援事業が、新たに「子どもの学習・生活支援事業」となり、今後も取組拡大が予想される(松村 2019)。学習支援事業の効果や効果をもたらす作用について、利用者を対象としたアンケート調査では、参加前に比べて参加後は、学校の成績、家で学習する習慣、将来の進学に対する見通し等が向上したという報告もされている(さいたまユースサポートネット 2017)。一方、学習支援が効果をもたらすとしても、それがどのような学習支援の作用やプロセスを経て起きているのかという点の研究や考察は、不十分なままであり、解明すべき課題として残っている。

本稿は、後述のように「学習支援によるケア」、福祉的なケアの視点に着目し、学習支援によるケアの作用によって効果をもたらされているのではないかとすることを、インタビューデータに基づいて分析する。「学習支援によるケア」の概念や作用を提示することで、今後の学習支援のあり方や取組に、少なくない示唆を与える意義があると考えられる。

### 2. 研究の視点および方法

本稿は、学習支援を福祉的なケアの観点から捉える「学習支援によるケア」という視点に着目し、学習支援が効果をもたらす作用を考察する。すなわち、学習支援教室における「学習支援によるケア」の作用によって子どもに様々な効果をもたらされるのではないかとすることを、ケアの視点を踏まえ、インタビューデータに基づいて実証・考察を行う。

本稿のデータは、著者も参加した研究グループの調査が首都圏 X 市の生活困窮世帯の学習支援に中学生の時に参加した若者を対象に行ったインタビューで得られたものである。調査に先立ち、研究グループの所属する大学の首都大学東京研究安全倫理規定に基づき、首都大学東京研究安全倫理委員会の承認を得ている(承認日 2017年3月29日、承認番号 H29-73)。調査は予備調査を含めて2016年8月～2017年10月にひとり概ね1時間で行った。実施前に、書面で調査趣旨、論文等での公表などを説明し、書面で同意を得た。インタビューは、「現在の状況(学校生活、仕事、家庭生活など)」、「学習支援の印象、感想、良かったことなど」、「進路・将来展望」などの質問項目に基づき、半構造型形式で行った。

分析は、佐藤郁哉(2008)を参考に質的分析方法を用いて、(概念的)カテゴリー、カテゴリーを構成するサブカテゴリーを生成した。

### 3. 倫理的配慮

一連の作業は、日本社会福祉学会の「研究倫理規定」等の遵守の上で行った。具体的には、

個人情報保護や倫理的配慮の観点から、個人が特定されないように匿名化（すべて仮名化）し、発言趣旨を損なわない限りで一部加工を行うなど、最大限の倫理的配慮を行った。

今回の調査で、有効となった計 21 名のインタビュー対象者リストを以下に示す（表 1）。

表 1 インタビュー対象者リスト（注）氏名はすべて仮名であり、特定できないように最大限配慮している。

事例No.	氏名 (注)すべて仮名	現在の状況	学歴 (高校生以外の最終学歴)
1	高井 涼介	公立全日制高校工業科3年	—
2	吉田 あずさ	公立定時制高校普通科3年	—
3	田口 朋美	私立短大保育系学科1年	公立全日制高校卒
4	澄川 翔太	公立定時制高校普通科2年	—
5	大石 亜紀	非正規雇用(印刷会社受付)	中卒
6	杉本 彩香	公立通信制高校普通科5年目	—
7	村瀬 史也	公立定時制高校総合学科3年目	—
8	野田 美奈	公立全日制高校普通科3年	—
9	堤 雅弘	公立定時制高校普通科2年	—
10	岡崎 大祐	公務員試験のため浪人中	公立全日制高校卒
11	上野 隆文	公立定時制高校普通科3年	—
12	加納 大吾	私立専修学校商業系学科3年	—
13	松崎 麻美	公立全日制高校普通科3年	—
14	佐々木 裕樹	公立短大工業系学科1年	私立通信制高校卒
15	倉森 義孝	私立全日制高校普通科3年	—
16	倉田 藍	公立定時制高校普通科4年	—
17	沼口 あかり	公立定時制高校普通科4年	—
18	五十嵐 栄子	私立全日制高校普通科3年	—
19	三島 絵里	非正規雇用(スーパーのレジ)	専門学校中退
20	前野 由希子	私立全日制高校普通科3年	—
21	長谷川 由香	療養中	中卒

#### 4. 研究結果

「学習支援によるケア」の効果をもたらす作用として、A【誰かに気にかけてもらう感覚】、B【頼れる大人に会える】、C【自分が成長していく実感】、D【人間的なつながり】、E【居場所感】、F【もうひとつの学びの場】の6つのカテゴリが生成された。以下、順番にみていく。誰のどのカテゴリの語りであるかを識別しやすいように、上記の6つのカテゴリ冒頭のA～Fと、表1のインタビュー対象者リストの事例No. をハイフン(-) でつなぎ、「(A～F) - (事例No.)」を発言に併記する。〈……〉は発言の一部省略、〈( )〉内はインタビューアの質問趣旨・要旨、または、筆者の説明的補足を示す。

表 2 A【誰かに気にかけてもらう感覚】

サブカテゴリ	発言者	発言内容
気にかけてくれる人の存在	杉本彩香 (A-6)	Q1:(勉強会に参加してから、勉強する習慣が前より増えたとか、やる気が出てきたというのはある?) A:手伝ってくれて、話を聞いてくれる人がいるっていうのが分かったから、じゃあ今日勉強会できなかった分を、「じゃあ家でもいいし、また学校の空き時間でもいいから、そこ進めてきなね」って大学生に言ってもらえたことって、やっぱり強かったなって。 Q1:強かったというのは。 A:気にしてくれる人がいるっていう。心配してくれる人(がいるっていう)。
	田口朋美 (A-3)	Q:(勉強会では勉強はどんな様子でした?) A:なんかもう本当にまったく勉強しなくて、行ったとしても話しているだけみたいな。本当に。でもなんか、そのいつも担当してくれる人が頑張ってくれたりして、そこからやっと勉強するようになったみたいで。その人がわざわざ宿題作ってくれたりとか、何かいろいろ工夫してくれました。
励ましや勇気をくれる人の存在	野田美奈 (A-8)	A:……塾とか行ってなかったの、すごいめになったというか、何か、その支援の方たちが教えてくれるから大丈夫なんだなって思ったりしました。あと、受験が近いときに、すごい励ましとかしてくれて勇気づけたりしてくれて心強かったです。
	三島絵里 (A-19)	A:……(高校受験の前期に合格できず、後期に別に高校を受けることになったが)全然説明会とかも行ってなかったの、ほんとによく分からない状態だったんですけど、取りあえず受けてみようって感じで、駄目元で受けたら、受かったんですけど。それはやっぱり勉強会の力でもあるんですよ。……(グループ討論にむけて)勉強会の方が「こういうのどう?」とか、練習のときも、話すことが決まって、文も自分では考えたんですけど、勉強会の方が結構「これはあったほうがいい」とか、アドバイスだとかくれたから、どんどんすごいいい感じになって。それも、なんか自分自身高校へ行きたいっていう気持ちもあったんですけど、一緒に教えてくれた方がすごい熱心をやってくれて、なんかほんとに行って良かったなって思って。

まず、A【誰かに気にかけてもらう感覚】というカテゴリが生成された(表2)。自分以外の誰か、具体的には、勉強会のボランティアの大学生やスタッフなど、自分を気にかけてくれる他者がいるのだという感覚を意味するものである。また、このカテゴリを構成するサブカテゴリとして、<気にかけてくれる人の存在>、<励ましや勇気をくれる人の存在>という2つのサブカテゴリが抽出された。まず、<気にかけてくれる人の存在>に関して、杉本さん(A-6)は、小学校の途中からほぼ不登校状態になっていた。だが、ケースワーカーが自分のことを「気にしてくれている」、「心配してくれて」いる感覚に背中を押されて勉強会に参加し、苦手だった勉強にも取り組むようになったと語った。また、田口さん(A-3)は、最初は、「本当にまったく勉強してなくて、行ったとしても話しているだけ」だったが、先生が「わざわざ宿題作ってくれたりとか、何かいろいろ工夫してくれ」、「そっからやっとな勉強するようになった」と、がんばる先生の姿に影響されたという。

次に、<励ましや勇気をくれる人の存在>として、例えば野田さん(A-8)は、「受験が近いときに、すごい励ましとかしてくれて勇気づけたりしてくれて心強かった」と語った。

表3 B【頼れる大人に会える】

サブカテゴリ	発言者	発言内容
相談相手	大石亜紀(B-5)	Q:(中3の勉強会は毎週行っていました?) A:毎週行っていました。……(勉強より、話を聞いてほしいときは)今日は勉強したくないって伝えて、「ちょっと話聞いてくれ」って言って。  Q:(困ったことがあったり、いらいらしたら誰に相談しますか?) A:耐えきれなくなったら(勉強会・居場所スペースの)スタッフに会いに行って、話聞いてくれて言って。
	高井涼介(B-1)	Q:(ちょっと、大人の人に意見を聞きたいなみたいなき、誰に相談しますか?) A:そうですね。まあ強いて言えば、やっぱり(ケースワーカーの)Mさんですかね。(高校に入ってから)Mさんにバイトのこととか話していたので。  Q:(Mさんは信頼できる?) A:まあ、そうですね。勉強会へ行っても、大体Mさんがいて話したりするので。
	上野隆文(B-11)	Q1:勉強面では、勉強が分かるようになったりとか、何かしら変わったりした? A:……相談に乗ってもらったりとか、勉強だけじゃなくて、何て言うんだろう。相談して、答えてくれたいなそういうこと。……相談乗ってもらったことは、かなりでかかったと思います。勉強だけスタスタやってたら、全くつまんないだろうし。
	佐々木裕樹(B-14)	Q1:(勉強会に長く来たのはなぜ?) A:楽しかったっていうのが1番だと思います。 Q1:(楽しかったっていうのは、勉強だけではないところも?) A:そうですね。(大学生のボランティアに)いろいろ相談したことあったんですけど……何か相談したんですよ。同学年の人とまた違う考え、それを聞いてみて、こういう考えもあるんだなと。
将来への助言	田口朋美(B-3)	Q:(将来、社会福祉士を考えようと思ったきっかけみたいなのはある?) A:……その、なんか、仲良くしてくれたっていうか、たくさん話してくれた4人の支援課(のワーカー)さんがいて、そのうちの2人がほほ福祉みたいな感じでたくさん話して、ああ、すごいなって思って、その後(私も人の)手助けっていうか、そういうのしたいなって思って、いろいろ調べていたら社会福祉士いいなって思ってやろうと思って。  Q:(どういう学校に進もうと思ったときの相談は?) A:大学生です。 ここ(勉強会)の。
	澄川翔太(B-4)	Q1:(勉強で大学生の話聞いたというのは、どんな話?興味を持った?) A:……やっぱ一番大学に行きえなって思えたきっかけは、やっぱ大学行くこと行かないのでは違うし、そもそもどんな大学でも出たほうがいいと思うし。あと、高校とかと違って大学って、そのやっぱ成人って、20歳にもなるし、友だちというんことしたり、夜遅くまで遊んだりとか、そういうのが楽しかったりするから「大学は絶対行って損はないと思うよ」って言われたことが、すごい印象に残ってて、そこで「ああ、じゃあ絶対大学行ってやるよ」っていう気になりました。  Q1:(それまでは、大学ってどんなイメージでしたか?) A:大学は出ればいいけど、まあ高卒でもそんな大丈夫だろうっていうか、何ていうんですかね、高卒でも頑張って働きたいだろうみたいな気ではいたんですけど、今、社会的にそんな甘く、高校ばって出ていい就職先就けるかって言われたら、また違うだろうって言われたときに「ああ、やっぱ大学は全然行ってるのど行ってないのでは違うんだ」っていう気にはなりました。
ロールモデルの獲得	上野隆文(B-11)	A:(思い出に残っている大学生は)……昔もう学校でヤンキーしてて、写真も見せてくれたんですけど、こんな大きな刀持って、金髪でもう、リーゼントして。そういうレベルの自分の写真を見せてくれて。……昔荒れてて、親もいろいろ援助してくれなかったけど、自分で奨学金で大学行って、働きながらちゃんと返済し終わってみたい、そういう話をしてくれて。ああ、この人相当努力してるんだみたいな。今、実際にいい人だったから、こういう人はいいなと思った。
	村瀬史也(B-7)	Q1:(ケースワーカーに勧められたことがひとつのきっかけで公務員を目指しているが、公務員になったらしたい仕事はある?) A:そうですね。僕は勉強会とかで良いことを結構学べたと思うんで、そういうことに、できればもっと(勉強会のことなどを)知らない子とかがいいたら知ってもらえるよう、(ケースワーカーのような)携われる仕事ができたらいいのかなって思ってます。

次に、相談したり信頼することができる、親でも学校の先生でもない大人に会うことができるということを含意する、B【頼れる大人に会える】というカテゴリーが生成された(表3)。また、このカテゴリーを構成するサブカテゴリーとして、〈相談相手〉、〈将来への助言〉、〈ロールモデルの獲得〉という3つのサブカテゴリーが抽出された。

このうち、まず、〈相談相手〉として、子どもたちは勉強会に、勉強を教わりただけではなく、勉強以外の生活一般についての相談や、話を聞いてくれる相手を必要として参加しているケースがみられた。例えば、大石さん(B-5)は、基本的には勉強会のボランティアやスタッフに、「おしゃべりをしに」行っていたほか、困ったことがあったり、勉強したくないときは、『「ちょっと話聞いてくれ」って言って』いたといい、大学生なども『「あ、いいよ」って言って普通に話したり』し、「それから勉強したり」するようになったという。

また、高井さん(B-1)は、「大人の人に意見を聞きたいとき」の第一の相手として、勉強会と関わりのあるケースワーカーの名前があがり、重要な相談相手になっていた。

また、生活一般の相談相手を越えて、勉強会のボランティアやスタッフから、中学卒業後の進路について〈将来の助言〉を得ているケースもあった。田口さん(B-3)は、現在短大在学中で保育士を目指しているが、高校卒業後の進学を考え始めた元々のきっかけは、ケースワーカーの姿をみて、「(私も人の)手助け」をしたい、「社会福祉士いいな」と思ったことであり、どういう学校に進むかの相談も勉強会の「大学生」にしたという。続いて澄川さん(B-4)は、大学生から大学の話の聞いたり、「大学は絶対行って損はないと思うよ」という言葉が印象に残り、それまでは意識していなかったが、大学に行くのとそうでないのでは違うと感じて、自分も「絶対大学行ってやろう」という気になったという。

さらに、ケースワーカーや勉強会のボランティアやスタッフが、話し相手にとどまらず、日常的に孤立しがちだったり、身近に少し年上のロールモデルが乏しいなか、日常生活や進路選択場面で助言をくれたり、ロールモデルになっているケースがみられた。例えば、村瀬さん(B-7)は、「勉強会とかで良いことを結構学べたと思うんで」、「できればもっと(勉強会のことなどを)知らない子とかがいたら知ってもらえるよう、(ケースワーカーのような)携われる仕事ができたらいいのかなって思ってます」と自分の経験を生かしたいと語り、進路選択の契機になっていた。と語った。また、上野さん(B-11)は、ある大学生が、昔は荒れていたが、奨学金で大学に行き、働いて返済した、「相当努力」している姿をみて、「こういう人はいいな」というロールモデル的な役割を果たしていた。

ここまでみてきたように、勉強会は、生活困窮世帯の子どもにとって、〈相談相手〉、〈将来への助言〉、〈ロールモデルの獲得〉という重要な働きかけをもたらしていた。

本調査では、勉強会が〈相談相手〉、〈将来の助言〉、〈ロールモデル〉として働きかけてくれる、B【頼れる頼れる大人に会える】場所となりうることが明らかになった。

表4 C【自分が成長していく実感】

サブカテゴリー	発言者	発言内容
勉強がわかる感覚	松崎麻美 (C-13)	Q1:勉強会って麻美さんにとってはどんな場だったっていう感じ? A:勉強を見てもらっているとか、数学のワーク解いてたって言ったじゃないですか。私、そのとき数学が大嫌い、本当に。もう減ばいいと思ってたんですけど。それを持ってって教えてもらって分かったと楽しいじゃないですか。多分、そこから高校で数学好きになったと思います。
	杉本彩香 (C-6)	A:やっぱり勉強会に行ったら、教えてくれる人がいるから、それで学校以上に自分でまた理解。細かくまで教えてくれるんで、自分自身でその後理解しやすくなったり。で、次勉強会に来たときに、「先週できてなかったのに、1人でそこまで進められるね」って言ってくれたりとかして。それ言われると、「自分ちゃんとできてるんだ」と思って。そこも(勉強が)分かれた、いい部分だなと思いました。
	吉田あずさ (C-2)	Q1:(今とっても勉強するようになったっていうのは、勉強会での体験が影響してると思う?) A:影響してると思います。なんか教え方とかすごく上手だったんで、その教え方に対しても私、今勉強してるんですけど、「ああ、これ教わったな」みたいな、こういう感じで教わったなって、こういう勉強すればいいんだなみたいな。……最初は本当に勉強の仕方が分からなくて、何をどこを勉強していいのかわからなかったんですけど。中3勉強会行って、それでもう3年たつんですけど、よくよく考えてみて、なんか教え方こうだったよなみたいな。それとおりにやったらなんか頭の中に入ってきて。それでなんか勉強が段々できるようになってきました。
	金森義孝 (C-15)	A:最初(勉強会に)入ったときは、緊張しなかったんですけど、やっぱり意外と入ってみて、ちょっと面白かったりとか。あと、 <u>大学生の方とか丁寧に教えてくれたんで、勉強がはかどったっていう感じは、結構ありましたね。</u> 学校の授業と勉強会って、ほぼあれではかどったので楽しかった。楽しかったし。
勉強姿勢の変化	佐々木裕樹 (C-14)	Q1:(ボランティアの先生の印象は?) A:ものすごく楽しかったですね。自分が分かるまで教えてくださったんで、すごく本当によかったですね。 Q1:そうなんだね。それは、やってる側も異様に尽きますね。 A: <u>あそこがターニングポイントだったのかな</u> と思います。勉強に対する大事な考えを。高校のときはなめたりとかしてましたけど。そこでやる楽しさ、充実したっていうのがちゃんと分かったので、続いたのかなと思いますけど。 Q1:続いたっていうのは、勉強会への参加? A:そうです。高校入ってから。
	澄川翔太 (C-4)	行ってみて、何ていうんですかね、初めてなんですけど、もうちょっと勉強がしたいとか。そのころも結構ゲームやってたこともあるんですけど、「 <u>ああゲームとかじゃなくても勉強も楽しいんだ</u> 」って思えたのが、 <u>やっぱり大学生の人とかと接すると、年齢が結構近かったりするんで、教え方が、何ていうんですかね、うまいって言うたら上からなんですけど、まあ上手な人が多いんで、教えてもらって勉強会、2時間くらいだった、そんならいたんで「ああ、短い」ってすごいと思ってたかなって。結構勉強会で姿勢も結構変わって、そこからやっぱり受験勉強も始めたと思います。それがなかったら危なかったんじゃないかって思う気もします。</u>
	野田奈美 (C-8)	Q1:(学習支援教室に参加して自分が変わったっていう点あたりありますか) A:自分が変わったっていうか、教える立場もいいんだなって何か興味を持ちました。……学校の先生になりたいって思ってたときも重なって、それで(勉強会では)すごい親身に教えてくれて、すごい役に立ったっていうか、 <u>自分も(同じような子どもたちの)役に立てればいいなって思って。……(修了式では)手紙で「私もボランティアになりたいです」みたいなこと書いたんですね。</u>

次に、C【自分が成長していく実感】というカテゴリーが生成された(表4)。勉強会に参加するなかで苦手だった勉強が次第にわかり、続けるようになったり、ボランティアの大学生から勉強に対する考えや勉強のやり方を学び、勉強する姿勢が変わっていったということを意味するものである。また、このカテゴリーを構成するサブカテゴリーとして、<勉強がわかる感覚>、<勉強姿勢の変化>という2つのサブカテゴリーが抽出された。

まず、<勉強がわかる感覚>についてみていくと、例えば、松崎さん(C-13)は、数学が「大嫌い」だったが、「教えてもらって分かったと楽しいじゃないですか」と教えてもらって理解できることが楽しい経験だったと振り返り、「多分、そこから高校で数学好きになったと思います」と、その変化が中学卒業後も続いていることを語った。

また、杉本さん(C-6)も、自分一人では難しくても、「教えてくれる人」によって、「学校以上に自分でまた理解」し、自分でも後に「理解しやすくなったり」と、勉強会での勉強が理解できる・わかる感覚を持ち、そうした経験を通して、「自分ちゃんとできているんだ」と思うようになったという。ほかにも、吉田さん(C-2)は、「最初は本当に勉強の仕方が分からなくて、何をどこを勉強していいのかわからなかった」という状態だったというが、勉強会で教え方を教わり、「なんか勉強が段々できるように」なったと語った。

続いて、<勉強姿勢の変化>として、勉強会で勉強を教わったり、話したりするうちに

勉強の考え方を教わったり、勉強の姿勢が芽生え、勉強するようになったという声が聞かれた。佐々木さん(C-14)は、ボランティアの先生が「自分が分かるまで教えて」くれた勉強会での経験が「ターニングポイント」になり、「勉強に対する大事な考え」や「楽しさ、充実」がわかり、高校進学後も勉強を続けるという姿勢につながっていったと語った。

また、澄川さん(C-4)も、年齢が近い先生の教え方がうまく、「初めてなんですけど、もうちょっと勉強がしたい」、「『ゲームとかじゃなくても勉強も楽しいんだな』って思えた」と語り、「勉強会で姿勢も結構変わって、そこからやっぱ受験勉強も始めた」という。

表5 D【人間的なつながり】

サブカテゴリー	発言者	発言内容
話し相手	杉本美香 (D-6)	Q: ボランティアの先生と色々なお話もしたんですか。 A: 勉強のこともだし、学校どんな感じとか、あと自分の趣味の話だったりとかも一緒に聞いてくれたり、大学生の話もこっちが聞いて「そうなんだ」って知ることあったし。 Q: ボランティアの先生とのコミュニケーションって大きかったですか。 A: 大きいです。そんななかでも、すごい仲いい、良くなったボランティアさんも、やっぱ行ってるとすごいたくさんできたりとかして。
	高井涼介 (D-1)	Q1: (勉強会に)ずっと行ってたというのは、割に何か結構それなりに面白かったかな。 A: そうですね。 Q1: どんなことが面白かった？ A: ……やっぱり大人の人と話せるというのですかね。
	前野由希子 (D-20)	Q: (勉強会で、ボランティアの)大学生などは話をしましたか。 A: ボランティアの人とか、それから支援課さんともよく話しました。会場に行って、でもなかは人がたくさんいるので、入口の廊下のところで支援課さんとおしゃべりしてたりしてました。
	吉田あずさ (D-2)	Q1: (勉強会に行ってよかったと思うようなことって何かありますか) A: 行ってよかったこと。なんだろう。でも勉強会行ったことによって、友達と話したりするのが多くなりましたよね。コミュニケーションもなんかしたりするじゃないですか、勉強会って。だからなんかその力もついてきたりとかして。 Q1: (話す力がつくってというのは、友達だけじゃなく、ボランティアの先生・大人とも？) A: はい。だからよく私、最初とかはもう知らない人とかは全然話できなかったんですけど、今は全然できます。……みんな仲よく本当に接してくれるんで。別になんか話づらくもなく、普通に話せてるんで、段々それが慣れてきて、本当に人と話すのができるようになりました。
人間関係を深める	澄川翔太 (D-4)	A: 勉強会で印象に残ってるのは、やっぱり何ていうんですか、その勉強の合間に休憩時間みたいなのがあって、そこでお菓子が配られて飲み物飲めて、で、そのいろんな大学生の人に話聞けてっていう。あと違う中学校の子たちともしゃべれてっていう。その勉強だけじゃなくて、何ていうか、人間関係っていうのもしっかりできた場所なんです。そのやっぱり塾とか行ってる、結構、まあ同じ中学校の子とかとはしゃべったりしても、行ったことないんで分かんないですけど、やっぱり勉強勉強っていうイメージが強いんですけど。やっぱりそういう勉強会とかだと、やっぱりそういうことも考えてくれるのかなって気もしますし、勉強をめちゃくちゃしようっていうよりは、何ていうか、人間性も深めて勉強もできればいいね、みたいな雰囲気でもやってくれたんで、すごいやりやすかったっていうのはあります、僕の中で。
	金森義孝 (D-15)	Q: (勉強会や、合宿で一緒にあった子と横のつながりみたいなのはあった？) A: 普通にありましたね。知ってる中学校の方とかいたり、普通に気が合って話したりとか、勉強とか教えたりとか、趣味についていろいろ話し合いとかしてましたね。
特別な時間・関係性	三島絵里 (D-19)	A: 勉強じゃなくて、勉強以外にもイベントとかあったから、そういうので他の人との交流もあって。で、友達もできたんで、そのとき。他の地域の方なんですけど、それで仲良くなって、普通に遊ぶようになったりとかも。そういう勉強以外のイベントも考えてくれたので、すごい楽しかったです。
	田口朋美 (D-3)	Q: 合宿どうでした？ A: すごく楽しかったです。 Q: 何が楽しかった、合宿？ A: 何が楽しかった、……全部です。 Q: 何か印象に残っていることはない？ A: ……(学生ボランティアの)過去を夜にお話、聞いたりとか、流しそうめんをしたこととか……。
	高井涼介 (D-1)	Q1: (学校でもいろんな行事をやると思うけど、学校でやるのと、勉強会でやるのと、どこが違う？) A: まあ、そうですね。やっぱり学校では同学年しかいないんですけど、勉強会では年齢が結構ばらばらだったので、それで、そこがいいですね。

次に、D【人間的なつながり】というカテゴリーが生成された(表5)。継続的に勉強会に参加するなかで、ボランティアやスタッフと勉強を教えるだけの関係にとどまらない人間関係の深化や、特別な時間・関係性を共有するという意味をもつものである。また、

このカテゴリーを構成するサブカテゴリーとして、〈話し相手〉、〈人間関係を深める〉、〈特別な時間・関係性〉という3つのサブカテゴリーが抽出された。

まず、多く聞かれたのが、これまで自分の話を聞いてくれたり、自分を気にしてくれる人が少なく、孤立しがちでコミュニケーションが苦手だったが、勉強会に行き、〈話し相手〉とコミュニケーションすることがとても大きかったという声だった。吉田さん(D-2)は、知らない人と話すのが苦手だったというが、「勉強会行ったことによって、友達と話したりするのが多くなりましたよね。コミュニケーションもなんかしたりするじゃないですか、勉強会って、だからなんかその力もついてきたりとかして」、「本当に人と話すのができるようになりました」と語った。また、「大人の人と話せる」(高井さん(D-1))というように、年上の相手と話せることが、重要な意味を帯びているケースもあった。

次に、〈人間関係を深める場所〉として、子どもたちに作用しているケースもあった。

澄川さん(D-4)は、勉強だけではなく、「人間性も深めて勉強もできればいいね、みたいな雰囲気ややっててくれたんで、すごいやりやすかった」、「人間関係っていうのもしっかりできた場所」と語った。また、金森さん(D-15)も、勉強だけではなく趣味について話したりと、人間関係を深めた経験が、継続的な学習支援の参加につながっていた。

## E【居場所感】

サブカテゴリー	発言者	発言内容
自分を迎えてくれる場所	杉本美香(E-6)	Q:(勉強会は自分の中でどういう場所でしたか) A:やっぱり自分を迎え入れてくれる人がいるっていう、うれしいのもあるし、また来てほしいんだっていう安心感がある。・教えてくれるのはやっぱり年上の人たちだから、この人たちにいい、ちゃんと頑張ってるって思ってもらえるほうがいいなって思ったから頑張ろうって、自分から何かするようにもなったし。 …(ずっと学校で、いじめにあっていた)だから同年代や周りが、自分のこと嫌いっていうか、嫌われてる、苦手なのかなって思って、で、大学生とかも学生だから若いし、最初は怖いとか思ってたけど、結構みんな優しく、面白かったし。 …だから、すごい自分には合う場所だとは思いました。 …(勉強会)みんなして1人を大きく迎えてくれるあったかい場所だと思います。
話しかけてくれる人	大石亜紀(E-5)	A:……結構気さくな学生さんたちがいっぱいいて、お話しも楽しかったです。その頃は、本当に人と話すのも嫌で。人と目を合わせるのさえも嫌で。帰らなくていいから、ここにいるみたいな感じで、それでも話しかけてくれたりとか、勉強もちょっとするようになって。できるようになると、もちろん楽しかったんですけど、勉強会とか居場所のおかげで、今、普通に話せる状態っていうのはありますけど、昔こんなじゃなかったの、変わったのが居場所と勉強会のおかげだと思いますね。
	三島絵里(E-19)	A:……(勉強会に行き始めたきっかけ)たまたま同じ、なんか生活保護の方がいて、それで「勉強あるんだけど」みたいな感じで言われて、母からも言われたんですけど、そのときはなんかびんとなくて、「えー？」みたいな感じだったんですけど、友達にも言われたから、友達いので行ってみるかみたいな感じで行ったら、結構みんな優しく。大学生とかもみんな優しく話しかけてくれて、やっぱり受験のときも結構助かったっていう部分もあるんですよ。
友人関係	長谷川由香(E-21)	A:(勉強会の合宿が)ものすごく楽しかったし、人脈も広がった気もしたし、あのとき初めてできた友達が4人いて……(その後一緒に)ずっと遊んで、勉強会というものはもう楽しいなって。確かに名前が嫌いだけど、勉強とか絶対無理だけど、うん、楽しかった、自分の居場所、見つけたみたいな。やっとなんか見つけられたかなって。

次に、E【居場所感】というカテゴリーが生成された(表6)。物理的・空間的にそこに居るといっただけではなく、ありのままの自分を承認してくれる他者の存在や、自己肯定感や安心感を覚えて安心できる場所であるという感覚を意味する。また、このカテゴリーを構成するサブカテゴリーとして、〈自分を迎えてくれる場所〉、〈話しかけてくれる人〉、〈友人関係〉という3つのサブカテゴリーが抽出された。

まず、〈自分を迎えてくれる場所〉があげられる。杉本さん(E-6)は、過去にいじめを受けた経験から、「同年代や周りが」「自分のこと嫌い」という苦手意識を持っていたが、

勉強会で、「自分を迎え入れてくる人がいる」という「うれしさ」や「また来ていいんだっという安心感」を感じ、勉強会は「みんなして1人を大きく迎えてくれるあったかい場所」であったという。また、勉強会で気にかけてくれる、教えてくれる人たちに「ちゃんと頑張ってるって思ってもらえるほうがいいな」と思い、「自分から何かするようにもなった」と、主体的に学習などに向かう気持ちに発展したと語った。

次に<話しかけてくれる人>として、大石さん(E-5)は、当時は「本当に人と話すのめ嫌で、人と目を合わすのさえ嫌」という状態だったが、勉強会で「気さくな」大学生が、「話しかけてきてくれたり」して、「勉強もちょっとするようになって」、「できるように」なって「楽しかった」、勉強会や居場所スペースのおかげで、「普通に話せる状態」になって、自分が「変わった」と語った。三島さん(E-19)も、「大学生とかもみんな優しく話し掛けてくれて、やっぱ受験のときも結構助かったっていう部分もある」と振り返った。

表7 F【もうひとつの学びの場】

サブカテゴリー	発言者	発言内容
楽しく学べる	堤雅弘 (F-9)	Q:(勉強会で教えてもらって、勉強身に付いたって感じてどれくらいありました?) A:何か、すごい楽しく教えてくれるので。すごいもう、普通の学校の勉強より……。 (学校の勉強は)全然、もう楽しくない感じで。パーってチョークで書いて、みたいな感じじゃないですか。……(勉強会は)何と云ってもポランティアが大学生なんで、のりがいいし、すごい優しく教えてくれる。わかりやすく。「ここがわかんないんだけど」って言ったら「じゃあここ、もう1回やろうか」みたいな感じで、レベルに合わせて丁寧に教えてくれるんで。学校よりいいな、とは思っていました。
	村瀬史也 (F-7)	A:……(良かった点として)勉強するときはやっぱりきちりやったほうがいいのかもしれないんですけど、でも僕の中では勉強、空間が、確かにかちかちな、何ていうんですかね、そんなみんながびっしりしている空間の勉強って、たぶん僕ん中じゃもうできないと思うんで、やっても何かも逆に構えちゃうんで、覚えることもたぶんできないだろうなっていうのはありますし、その勉強を教えてくれる大学生がほんとにいい人たちばっかなんで、勉強ではないことを話して「じゃあ、少し勉強しよっか」とか、前置きを大切にしてくれる人たちばっかだったので、ほんとにお世話になっていい人たちばっかだったので、そういうとこきめていいとこだったのがな。
質問しやすい	上野隆文 (F-11)	A:勉強会の大学生は、よほどじゃないとそこまで年、離れてないじゃないですか。18歳で高校卒業して、すぐ大学生の人ももちろんいるだろうし、30代の人もあるし。 Q:(聞きやすい、近づきやすいという感じ?) A:もうそれはそうです。 みんなが学校では、例えば授業中にいちいち「はい。そこ何々です」みたいな、そういうことやってるとみんなに迷惑かっちゃうけど、塾(勉強会)の場合は、一人一人が二人一組みたいな、生徒二人に先生一人みたいなそんな感じに対応してくれるのが、すぐに質問したら答えてくれるとか、そういうこともあるので。もちろんそこら辺は助かったりとか、質問しやすい立場でもあったし、聞きやすい立場もあるんです。
	佐々木裕樹 (F-14)	A:自分が分からないところを気軽に聞ける場所みたいな認識でしたね。 Q1:(それは、勉強会に一定の信頼関係があったっていうのかな) A:とにかく、ここにいる人たちなら、絶対答えてもらえるという。 1週間分、分からないことメモ帳にまとめていろいろ聞いてたりとかして。
	岡崎大祐 (F-10)	Q1:(勉強会に参加して、勉強が分かるようになったとか、成績が上がったとかってありましたか?) A:っていうよりは、何だろう。何かこんな言い方したらあれですけど、レベル自体が結構低かったんで、その教える内容っていうか。その辺はもう一応頭に入ってたんで、勉強する場所をもらってたっていうかって感覚でしたね、自分的には。……ほんとに分らないとこあったら、大学生の人たちもいたんで聞けたっていう感じですかね。 Q1:勉強する場所、家ではあまり勉強しなかった? A:家だとほんと集中できないんで。
自分に合わせてくれる	澄川翔太 (F-4)	Q:(勉強会と、学校の授業はどこが違うんだろう?) A:……学校とかって先生1人に対してクラス30人でやりますけど、勉強会とかってやっぱり1人に対して1人で接してくれるんで。……学校とかだったら30人もいるんで、例えば「あ、あそこの方程式分かんないなあ」とかいう場所を手挙げて聞くのって、何かこう「うーん」って感じがしてたのもあるんですけど、その勉強会とかだったら隣に大学生がいてくれるんで、「あ、分かんねえな」って思ったところを、ぼって聞けたりするんで。……「あいつ分かんねえんだ」って思われるのがすごい嫌だったので。……そこが、こっそり教えてもらえるところがでかかったと思います。
	佐々木裕樹 (F-14)	A:……(勉強会に実際に参加する前は)座って講義ずつと受ける体制だと思ったんですけど、フリースタイルで自分ができたりとか、マンツーマンで教えてくださったりもできたので。 Q1:やっぱりそれ大きいかな。 A:大きいですよ。 Q1:マンツーマン。 A:マンツーマンでかいですよ。本当に。中学とかになるといっぱいいるじゃないですか。人が、頭いい人とかのペースに合わせてたりとかするので、自分が分かんないと置いていかれちゃうので、そこをちょっと戻ってできるのが、すごいいいですね。
	野田美奈 (F-8)	A:……やっぱり塾とか行ってなかったんで、何が分からないところとかを教えてもらえたところがすごい良かったと思います。あと、面接も学校でも何回か練習するんですけど、やっぱり足りないところもあって、回数が。だから、その支援で面接練習できたのもすごい良いなりました。



次に、F【もうひとつの学びの場】というカテゴリーが生成された(表7)。家庭でも学校でも塾でもない、もうひとつの学びの場が勉強会であったという意味をもつものである。また、このカテゴリーを構成するサブカテゴリーとして、〈楽しく学べる〉、〈質問しやすい〉、〈自分に合わせてくれる〉という3つのサブカテゴリーが抽出された。

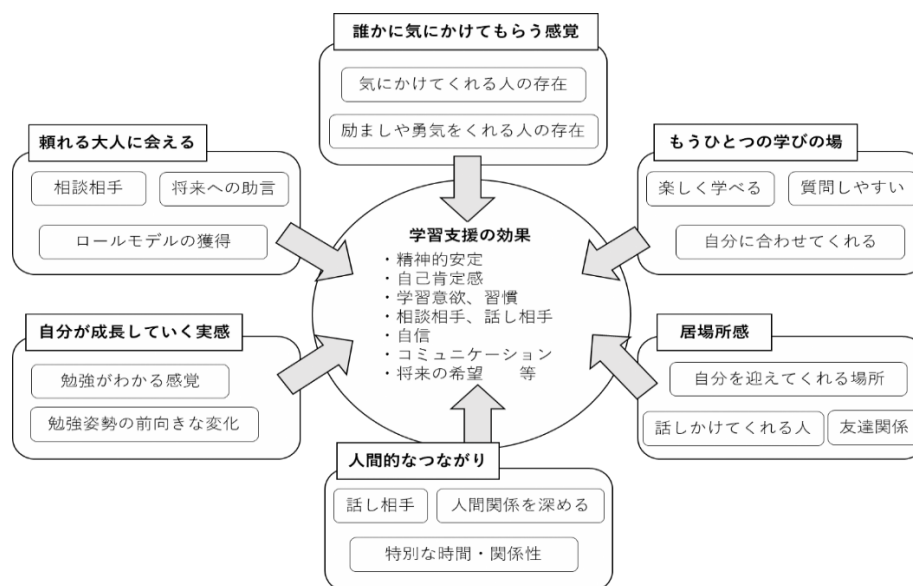
まず、〈楽しく学べる〉として、堤さん(F-9)は、「ボランティアが大学生なんで、のりがいいし、すごい優しく」、「レベルに合わせて丁寧に教えてくれるんで。学校よりいいな、とは思ってました」と語った。また、村瀬さん(F-6)は、すべて勉強という空間ではなく、「勉強ではないことを話して『じゃあ、少し勉強しよっか』とか、前置きを大切にしてくれる」ことが、構えることなく、勉強に取り組めて良かったとふり返った。〈質問しやすい〉として、上野さん(F-11)は、大学生は「すぐに質問したら答えてくれる」ところが良かったと語った。佐々木さん(F-14)も、「ここにいる人たちなら、絶対に答えてもらえる」という信頼のもと、質問を書き溜めて勉強会にのぞんでいたという。

最後に、〈自分に合わせてくれる〉として、澄川さん(F-4)は、学校の授業ではわからないところを質問すると、周りに自分が理解していないと思われるのが嫌だが、勉強会では、「こっそり教えてもらえるってところがでかかったと思います」と語った。野田さん(F-8)も、塾に行ってなかったので、「何か分からないところとかを教えてもらえたところがすごい良かった」ことに加えて、受験の前に「面接練習できたのもすごいために」となったという。学習支援教室で大学生やスタッフから学習を含むケアを受けることが、孤独感や、勉強を教えてくれる人の不在という不利な状況を緩和する働きをしているといえる。

## 5. 考察

ここまで本稿で明らかになった、学習支援によるケアの作用と、紙幅の関係から十分に言及できなかったが、子どもから語られた効果を以下に示す(図1)。

図1 学習支援によるケアの作用と効果



本稿は、学習支援教室に参加した者のインタビューの代表的ケースを引きながら、そこで語られた効果と、それらを生み出している作用として、学習支援を福祉的なケアの観点から捉える「学習支援によるケア」に着目し、その作用や意義を考察してきた。

その結果、「学習支援によるケア」の作用として、A【誰かに気にかけてもらう感覚】、B【頼れる大人に会える】、C【自分が成長していく実感】、D【人間的なつながり】、E【居場所感】、F【もうひとつの学びの場】という大きく6つのカテゴリー群が働いていることが確認できた。すなわち、これらの作用が、「学習支援によるケア」の作用として、学習支援に参加した子どもに影響し、様々な不利の状況でも、精神的安定や自己肯定感などをもたらしたり、学習支援で培った対人能力などがその後も維持されるケースがみられた。

本稿は、学習支援の効果を生み出す作用としての「学習支援によるケア」の意義や重要性を提示し、学術的な観点のみならず、喫緊の社会課題である子どもの貧困対策に少なくない示唆を与えるものといえる。一方、いかなる「学習支援によるケア」がより効果的で、継続的な影響を子どもに及ぼすか、また、「学習支援によるケア」の態様と各効果との親和性や対応関係の精緻化などについては、今回の分析では必ずしも十分に分析できていない。

さらに、本稿は、学習支援による子どもへの効果についてのみ考察してきたが、ケアを提供する、ケアの担い手にも一定の効果があるという報告もある(松村 2017)。いわば、ケアという営みを通して、受け手と担い手の双方に、相互作用的に効果が働く可能性がある。

また、より俯瞰すれば、家庭空間である「私」でも、学校など教育機関による「公」でもない、NPOなどのコミュニティである「共」(広井 2019:82)において行われるケアの営みは、経済的次元に回収し尽くされない、人々の連帯、つながり、well-beingなどの福祉の本質にも関係するものであろう。これらの点への考察は、今後の課題としたい。

**付記** 本稿で用いるデータは、「子ども・若者の貧困対策施策の評価と社会的影響に関する評価研究」(日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学推進事業(実社会対応プログラム)」平成27~30年度)の調査データの一部である。

**謝辞** 調査にご協力頂いた皆様、共同研究者の皆様に、心より深く感謝申し上げます。

## 文献

- 広井良典(2019)『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社。  
佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社。  
さいたまユースサポートネット(2017)『子どもの学習支援事業の効果的な異分野連携と事業の効果検証に関する調査研究事業報告書』「利用者(中学生)アンケート」,75-89。  
松村智史(2019)「生活困窮世帯の子どもの学習・生活支援事業の成立に関する一考察：国の審議会等の議論に着目して」『社会福祉学』60(2),1-13。  
松村智史(2017)「生活困窮世帯の子どもの学習支援に参加する大学生ボランティアの学びに関する研究」『日本教育学会(第76回大会)要旨集』214-215。